

【講 演】「活きたボランティア活動とは」

講 師 文化ボランティアコーディネーター

大久保 邦子氏

改めまして大久保でございます。よろしくお願いします。実は、講演の依頼をいただき半年ぐらい前からずっと私の役割は何だろう！と頭の中にあっただのですが、料理人が市場に行ってその日の材料を見ないと料理が浮かばないということをよくおっしゃいますが、私もみなさまのお顔を拝見し、その場の雰囲気を見ながらお話するのが一番のような気がしてしまして……。考えていることの一部しかお話できないかも知れませんが、今日は幸いこれから四時半までのお付き合いです。私の最初の役目は、アイスブレイクといいますが、今日一日の学習をリラックスして過ごしていただくことかなあ、と思っておりますのでご協力よろしくお願いします。

今回タイトルをいただいた時に、「活きたボランティア活動とは」とあり、エーッ？と思いました。私もいろんな講座やイベントを長いこと企画してきましたが、そのイベントや講座のテーマ・タイトルを決める時、すごくああでもないこうでもないと考えた挙句、今一番自分たちの課題になっていることをテーマに掲げてきました。なので、エーッ「活きたボランティアとは」ということは、もしかして、今、ボランティアは「死んだ」と思っているのかな？と、ちょっといじわるなことを考えたりもしました。私もこの道に入ってというかこの課題に向き合って40年。ず〜とテーマを追いつけています。テーマというか課題があるからこそ、今日にいたっているのかな〜と思っています。そんなことを今日一緒にお話しながら、情報というより想いを共有できたらと思っています。

お断りしておきますが、先ほどご紹介の中で専門分野なんてちょっと面映ゆい紹介がありましたが、私は研究者ではありません。専門家でもなく、この道ひと筋で来ているのですが、まともに学んだことはありません。ただ自分のやりたいテーマを掲げて、ずっと繰り返し繰り返し取り組んでいるうちに、多分、文化ボランティアといいましょうか、あるいはミュージアム関係のボランティアについては研究者の方々より体験と想いだけは深くなったのかなと思います。ということで、未だにテーマや課題を掲げ、取り組んでいます。

先ほど見せていただいた資料にも、「文化ボランティアって何だろう」とありましたが、この春、とびうめの会のオフィスに立寄ったときに、5〜6人の会話にちらちらとそのことが出ていました。それは本音だと思います。呟かれている言葉には非常に重みがあるな、と思いました。一体自分たちがやっていることは何なのだろう。活動とか何とかって段階があって、10年ぐらい同じことばかりしているとマンネリ化を招き、改めて、ボランティアって何だろう、文化ボランティアって何なのだろうという疑問が湧いてきます。その想い・理解には非常に個人差がありますよね。

(参加者への問いかけ)：「ボランティアって何なのでしょうね。」

(参加者の答え)：「利益を求めずに人の役に立つことをすること」

「はい。」「これは優等生の回答ですね。」(一同笑)

というのは、私は12〜3年前になりますが、金沢大学で社会教育主事の講習、要するに経験豊かな行政関係者の方々の講習ですけど、そこでボランティアについて講義をするわけです。当初は80名近い受講生でした。忘れもしない1年目の講座でしたが、話し終わってから、ボランティアについてのイメージというキーワードを挙げてもらおうと、私

が考えていた以上のことがいっぱい出てくるのです。というのは金沢だったので北陸4県の地域で活動している行政担当者ですからいろいろな想いを地域の中でしているので、ある人にとっては、偽善、自己欺瞞と言ったかしら、そのような非常にマイナスな言葉がでてきたのですね。それで教科書通りに答えてくれる人もいれば、いろいろ体験していると「ボランティアって、何だかいい加減で嫌な活動だ」という風に行政の方は強く感じているのかと思い、次の年からは最初から私はボランティアについて、皆さんがどのように考えているのか、という事をまず聞くことにしました。

では「ボランティアとは何か」という事で、もう一人ぐらい聞いてみましょう。

(参加者の答え):「私たちの場合は宗像で歴史の観光ボランティアガイドをしています。退職後の人が殆どで、会費と観光案内料で運営しています。行政や公共団体からの支援はありませんが、やりがいがあり自己満足は感じています。」

「自己満足！結構です」。ほんと自己満足という言葉は本心というか、正直なとてもいい話だと思います。

それでは「文化ボランティアとは何か」「あなたは文化ボランティアってどういうものか」と思っていますか」

(参加者の答え):「えー、はっきり言ってわかりません。今思っていることは、自分が持っている資質を発揮する場を求めるためです。自分が興味ある対象について、そういう資質を発揮する活動と思っています。」

「はい！非常に優秀な答えです！私が考える正解の一つです。」自分がやりたいと求めているもので自己実現ということをよく言いますね、もう亡くなられましたが河合隼雄元文化庁長官が聞かれたら非常に喜ばれると思います。

文化ボランティアについて、いろいろな思いの人がいると思います。自分が求めているものが何かもわからない、どう生きていったらいいかわからないながらやってきたのだ、という人だっているかもしれません。文化ボランティアはそのように非常に芒洋というか、100人いたら100人の暮らしや人生があるように、ボランティア活動もそれと同じと思っていいかもしれません。

そういう中で、その違いについて行政側、あるいは NPO 側から考えてみると、私はつくづく思うのですが、行政は何によって動くか、ボランティアは何によって動くかということ。これも最初から考えていたわけではありません。20年30年40年とやっているうちに「行政の行動原理」について思い至ったことですが、行動の1番は何だと思いますか、行政は何によって動くのでしょうか。

行政は、国が施策を決める、それに基づいて予算をつける、それによって動く、という大きな行動原理があります。逆を言えば施策がない、あるいは予算がないと動かない。ではボランティアは何によって動くか。行政が施策や予算がないと動かないということは、私たち住民にとっては腹が立つことですが、考えようによっては腹を立てることが次の活動の原動力になるともいえるのです。小さな地域社会での経験ですが、たまたまグループの話し合いの中に議員の方もこられたので、「こういうことやって欲しい」と提案したのですが、即座に「予算がついてないからやれない。」と言われるのですね。議員や行政は予算がついてないとやらない。やれない。だけどボランティアは予算がなくても、まず思い・課題・テーマ、やりたいという思いがあれば、予算は後からついてくる……と、私は思います。

ここまでの話で違和感があったり、分からないことはありませんか。

(参加者・男性):「まだ1ヶ月しかやってないので……。大体私が考えていた通りの

内容かなと思います。」

「よかった、ありがとうございます」というのは、私も言いたいことがいっぱいあるものですから途中を抜かしてポンポン言うことがあります。そのために一方的な話になってこのところがわからないと、あとから言われることがあります。こうやって時々確認しながら話を進めていますので、分からないことがあったらその都度おっしゃって下さい。

「活きたボランティア活動とは」というテーマはどちらかといえば、今はやらないほうがいいのではないかと、最後に共有することだと私は思っています。いろいろあれこれ考えた後で、では、「活きたボランティア活動ってなんだろう」ということに最終的にもっていき、終了出来ればいいかなと思っています。

『文化ボランティアの魅力』

これはそれぞれで、色々あると思います。趣味が豊かで、これをやりたいとはじめからはっきりしている人もいますし、何をやっていいかわからないけど、とにかく魅力的だし、或いはボランティアをやっているミュージアムがあるから行ってみようという人もいますし、文化ボランティアをされる方々は、いろいろ違うと思いますから後ほど申し上げることにして、今は触れません。

『福祉や災害ボランティアと文化ボランティアの違いについて』

これはとても大事なことです、と申し上げるのも、このことを本当に理解していただければ、皆さん今日はもう帰っていただいてもいいぐらいです。皆様は、次のことを一言申し上げれば、多分、理解していただけたと思います。

福祉や災害ボランティアとの違い、これは私が言い始めたことではなく、今、仙台の市長をされている奥山恵美子さん、長年勉強会を一緒にさせていただいたのですが、ある時ふとおっしゃった言葉です。私はこの言葉をととても大事にして、いろいろ紹介させていただいたし、ビデオも作っていますが、「福祉や災害のボランティアは課題が見えているから、現場の対応で何とかできる。」例えば、歩けない・目が見えない方がいたら手をひいてあげることがすぐ出来ます。現場の知恵ですね。火事になったら水を、飢えた人がいたら食べ物、というように対応や課題が見えている。だからある意味ではやりやすい。もちろん困難は伴います。課題をどうするかということは別として。

しかし、これに対して文化ボランティアはすぐには目に見えない。一見何事もなく平和だと、食べるものは一応揃っているし、寝るところもあるし、ということで一見平和だから見えない。だけど社会の動きやその背後をよくよく考えると、課題やテーマが見えてくる。そのことを奥山さんは、こういう言葉でおっしゃっています。「災害や福祉は横の活動だ」と思う・・・と。すぐに現場での対応が見えるわけです。ところが文化ボランティアは（当時は生涯学習という言葉を使っていましたが）、「生涯学習の分野の活動は縦の活動で、色々自分で積み上げていくクリエイティブな活動です」・・・と。だからいくらでも想像も深まるし勉強もしなきゃならないし、縦の、即ち未来へ向っていく豊かな活動なのです。その違いを聞いて「なるほどなあ」と思いました。

文化ボランティアはすぐには課題がみえない。でもよくよく考えるといろいろなところに課題やテーマはあるのです。福祉や災害ボランティアとの違いについて、これは是非覚えておいてください。今後活動するときの一つのヒントになると思います。

『マズローの欲求5段階説』

このマズローさん、アメリカの心理学者で、亡くなられたのが1972年です。今はもう共通1次試験などにも出るそうで、社会科で教わるそうですが、われわれ世代ではマズローという心理学者のことはまったく教わりませんでした。彼が提唱した非常に分かりやすいものです。

マズローの欲求5段階説とは、人間の欲求は5段階に分けられ、1段階目の欲求は生きていくための生理的な欲求です。今の人たちに何が欲しいですか、何がお望みですかと聞くと、オール電化とか、あるいはもっと先をみつめ、原発無しの世の中とかいろいろあるでしょう。終戦時女学生だった人に、終戦の玉音放送を聞いた瞬間、何を思ったかと聞いたら、夜、空襲警報のことも何も気にしないでゆっくり休みたいと言われたそうです。これこそ**1段階目の生きていくための生理的欲求**ですね。人間は生理的欲求が満たされると次は何を望むでしょう。それは安定することを望みます。安定とか安全、いろんな言葉で翻訳されていますが、その状況がずっと続くといいなと思うわけです。例えば収入があってもこれが定期的に保障されるといいなあと思う気持ちですね。これが**2段階目の安全安定**です。それが満たされると次はなんでしょう。実はこのマズローの欲求5段階説は、私ももう何年も何十年も前ですけど社会学のボランティアの研究者に教わりました。その次には安全が一応保障されると、次には何を望むでしょうか。

マズローの5段階説の**3段階目は帰属意識、仲間意識**。どこかに所属している、安全のちょっと上になりますが、どこかに所属する。あるいは家族が欲しい。会社で孤立するのではなく、仲間が欲しいといったそういう帰属意識です。

その次**4段階目が自我**で、自我の意識、欲求、仲間の中でも自分を主張したい、自分も認められたいという社会的な欲求です。

最後の**5段階目は自己実現**です。私がボランティアをやり始めた当時は、生涯学習、あるいは社会教育ボランティアとは自己実現、自分のやりたいこと、あるいは能力を自分の時間や技能によって実現、活動するというもので、生涯学習のボランティアとは自己実現だと教わりました。そんなことで、このマズローの5段階説はボランティアの講座などで盛んに引用されたわけです。

但し、私自身がこのマズローの5段階説に注目したのは、3段階目の帰属意識、仲間意識です。公民館や文化ホール、博物館等の場に所属して仲間と一緒にやる活動ということで、人間関係や家族関係が希薄になった最近では、より注目されるポイントではないかと思っています。

ところで、マズローさんは晩年、5段階のうえにもう一つの段階を指摘したといわれています。これは**自己超越**というもので、エゴを無くして見返りを求めず社会貢献や自己実現する行為、段階です。功をあげ、名をなし、財をつくった方々に見られる行為で、事業で成功した人が、文化活動をする財団をつくって美術館を作ったり、人材育成の学校や文化ホールなどをつくる活動がこれに当たるのではないのでしょうか。

好きなことで自己実現するという、いわゆる文化ボランティア活動をされているみなさんは、このマズローの5段階欲求説を十分ご理解いただけるのではないかと思います。

また、仲間と活動できるこのような文化施設があるということがいかに大事かについては、最後の総括・展望の中でもお話できればいいかなと思います。

私も今日一日ずっとお付き合いさせていただきますので、終わりの時間までまたいろいろと学習させていただきたいと思います。とりあえずこの辺で……。

ありがとうございました。